

土佐藩 武市半平太の廻国修行について

広島県立宮島工業高等学校 森本邦生

I. はじめに

武市半平太(1829～1865)は土佐の下士で白札と呼ばれる階層に属した。土佐勤王党を組織したことで知られるが、一刀流と鏡新明智流をおさめ道場を開き門弟に教授していた。万延元年(1860)と文久元年(1861)に廻国修行を行っている。

武市半平太の廻国修行については『武市瑞山関係文書』¹⁾、『維新土佐勤皇史』²⁾、『武市瑞山と土佐勤皇党』³⁾、『幕末斬奸録』⁴⁾などに記されているが、その詳細については記述されていない。本研究では武市半平太がのこした『劔家英名録』⁵⁾二冊をもとに武市半平太が廻国した地域においてどのような流派が存在し他流試合を行っていたのかを明らかにし、江戸後期の各藩の剣術の動向に関する基礎資料としたい。



II. 武市半平太の武術の経歴について

武市半平太の一刀流のはじめの師は千頭傳四郎であった。千頭は身分は低く足軽であったが、江戸勤めの間に剣術修行をし、免許を得て帰国したという。また、千頭病死の後に師事した麻田勘七は馬廻り麻田利大夫の次男で弘化3年(1846)に稽古料として三人扶持をうけ、後に藩校致道館の剣術指南役にも任じられている³⁾。千頭傳四郎と麻田勘七との関係は不明であるが、武市が伝授された伝書⁵⁾からは師弟関係であったことが推定できる。つまり麻田は武市の兄弟子であったのではあるまいか。

武市半平太が修行した一刀流は『劔家英名録』

⁵⁾には小野派一刀流とあるが、武市が伝授された伝書⁵⁾から江戸の中西家によって伝えられた一刀流であることが分かり、武市半平太が早くから防具着用の稽古をしており、防具着用の他流試合に違和感を感じていなかったことが想像できる。また、そのことが江戸における鏡新明智流 桃井春蔵のもとでの修行を容易にしたことも想像に難くない。さらに廻国修行をも容易にしたのであろう。

安政2(1855)年、土佐藩において他流試合は解禁となるが、それ以前は一般的には行われず、無外流、小栗流は厳しく他流試合を禁じていた⁶⁾。しかし、天保8年(1837)に土佐中村の樋口真吉が柳河藩の大石進のもとに赴き、入門して修行し免許を得て大石神影流を指導したのは無外流の因習に反発したからであり⁷⁾、他流試合を行う流派は藩庁の他流試合の解禁以前にも土佐には存在していた。

III. 廻国修行の経路と試合した流派・人数

1. 万延元年(1860)の廻国修行

万延元年(1860)の廻国修行は門弟の岡田以蔵、久松喜代馬、島村外内の三人を同道して行なわれた³⁾。このことは廻国修行の受け入れ先の資料にも記されている。

長州藩の記録である『長藩へ来ル他藩人事』⁸⁾には「万延元年十月十二日」の記録に人名の誤字は多いものの武市半平太らが来訪したことが記されている。また久留米の真神陰流師範である加藤田家文書の『稽古諸願控』⁹⁾にも万延元年12月14日に武市半平太ら4名が試合に訪れた事が記されている。

廻国修行の経路は以下の通りである。()内に示した地名は藩庁所在地等の現在の地名。

8/18, 西讃円亀藩(香川県丸亀市) → 9/6, 岡山天城藩(岡山県倉敷市藤戸町天城) → 9/7, 岡山新田藩(藩主は岡山県岡山市居住、主邑は岡山県浅口市)、岡山藩(岡山県岡山市) → 9/11, 12, 美作藩(岡山県真庭市勝山) → 9/17, 18, 20 備中松山藩(岡山県高梁市) → 9/22, 福山藩(広島県福山市) → 9/22, 芸藩(広島県広島市) → 10/5, 岩国藩(山口県岩国市) → 10/7, 徳山藩(山口県周南市徳山) → 10/9, 防州右田(山口県防府市) → 10/12～17, 長州藩(山口県萩市) → 10/24, 筑前秋月藩(福岡県朝倉市秋月) → 10/29, 西肥唐津藩(佐賀県唐津市) → 11/9, 肥州佐嘉藩(佐賀県佐賀市) →

11/11, 西肥蓮池藩(佐賀県佐賀市蓮池) →
11/13~18, 久留米藩(福岡県久留米市) →
11/21, 22 南筑柳河藩(福岡県柳川市) → 11/23,
柳河藩宮部(福岡県大牟田市) → 12/2, 岡藩
(大分県竹田市) →12/8, 延岡藩(宮崎県延岡
市) → 12/11, 高鍋藩(宮崎県児湯郡高鍋町)
→ 12/13, 佐土原藩(宮崎県宮崎市佐土原町)
→ 12/17, 飢肥藩(宮崎県日南市飢肥)

2. 文久元年(1861)の廻国修行

文久元年(1861)の廻国修行は江戸に出るとい
う主たる目的に付随して行われたものようで
あり、数か所でしか試合を行っていない。小笠原
保馬を同道している。

『武市瑞山と土佐勤皇党』³⁾では「剣術修行の
名目で暇を請ひ、自由な旅を続けたもので、内心
或いは窃かに期する所があったのであろう。」と
のみ述べ、試合については触れていない。また、
『維新土佐勤皇史』²⁾にも試合については触れら
れていない。江戸では長州藩の久坂玄瑞や桂小五
郎と交わり、初めて土佐勤王党同士血判盟約書
を作っている²⁾。

廻国修行の経路は以下の通りである。()
内に示した地名は藩庁所在地等の現在の地名。

4/24, 西讃円亀藩(香川県丸亀市) → 5/1,
龍埜藩(兵庫県たつの市) → 5/12, 京都(京
都府) → 5/17, 伊賀(三重県伊賀市) → 5/21,
津藩(三重県津市)

IV. まとめ

1. 流派名・師範名の記載がない藩

万延元年の『劔家英名録』中、流派名・師範名
の記載がないのは岡山天城藩、福山藩(誠之館)
であり、文久元年の『劔家英名録』では伊州藩(伊
賀精武館)、津藩(津藩演武荘)である。これら
の藩では試合や、稽古に関して流派の垣根が低く
なっていた可能性がある。

福山藩では流派にかかわらず初段、二段、三段
という段位制がとられており、流派を超えた共通
の実力の尺度が模索されていた¹⁰⁾。

「伊州藩」での試合は津藩の領地である伊賀で
の試合であり、津藩と同じ理由で流派名・師範名
の記載がないものと思われる。土佐藩の樋口真吉
が津藩で試合を行った嘉永5年(1852)9月18日
の日記の記録には「目付役出て挨拶アリ、試合両
側=立ル人数三拾餘人、分相を貪る事甚劣ナリ、
拙堂之意如何、黄昏終る」とあり、19日の記録に
も「暫有て人数廿餘人出来り、三輪=組て試合、
午前=終ル」とあり、流派ごとの試合はなされて
いないことが分かる。また、同じ日記の記録に津
藩の武場の壁書が記されておりその最後に「諸流
之花法ハ各同しからすといへとも試合=なり候而

は刺撃之ニツに帰し候間、相互=打解け彼長を取
り己か短を補ひ、他流之批判妄ニ致間敷候事」と
記されている¹¹⁾ことから、津藩でも試合に関し
ては流派間の垣根は低かったものと推定できる。

2. 塾生のある流派

万延元年の『劔家英名録』には他藩からの塾生
を有する流派の記載がある。東備(岡山新田藩)
の直心影流、美作藩の神道無念流、久留米藩の直
心影流・津田一傳流・真神陰流、岡藩の直指流・
抜討流である。直心影流や神道無念流、津田一傳
流、真神陰流などは早くから防具着用の剣術を行
っていた流派であり、防具着用の試合の技術の優
れた流派に他藩から留学したものと考えられる。

直心影流や神道無念流は江戸を中心とした流
派であり、他地域で行われた流派がその地方に根
付いた例である。これらのほかにも高鍋藩には大
石神影流と津田一傳流が、飢肥藩には大石神影
流が行われており、防具着用での試合の技術を有
した流派が他地域に広まっていく傾向を読み取る
ことができる。

IV おわりに

土佐の武市半平太が残した『劔家英名録』を分
析する事によって、万延元年(1860)と文久元年
(1861)に半平太が訪れた地で行われた流派の状
況について知見を得、今後の研究の基礎資料とす
ることができた。引き続き他の英名録等を調査す
る事によって年代によって各地でどのような変
化が起こっているのかを確認したい。

註

- 1) 『武市瑞山関係文書』第一・第二、編集兼発
行：早川純三郎、1916、日本史籍協会
- 2) 『維新土佐勤皇史』瑞山会、1912、富山房
- 3) 『武市瑞山と土佐勤皇党』平尾道雄、1943、
大日本出版社峯文荘
- 4) 『幕末斬奸録』山下白雲、1927、龍文館
- 5) 高知県立歴史民俗資料館所蔵資料、武市家文
書
- 6) 『平尾道雄選集第4巻 土佐・武道と仇討ち』
平尾道雄、1980、(株)高知新聞社
- 7) 『樋口真吉 第一回廻国修行日記について-大
石神影流の土佐への伝播-』、森本邦生、日本
武道学会第42回大会発表資料、2009
- 8) 山口県文書館所蔵、毛利家文庫
- 9) 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化
史資料部門所蔵資料、桧垣文庫
- 10) 『誠之館一件帳 式番』福山城博物館友の会
編集、2007
- 11) 『土佐藩大石神影流樋口真吉の廻国修行につ
いて-嘉永5年の廻国修行を中心として-』森本
邦生、日本武道学会第44回大会発表資料、2011